

仙台文学館 ニュース

Sendai Literature Museum News

第十五号



北山の輪王寺付近



【無伴奏】
小池真理子
(新潮文庫2006年)

坂道

文学のある風景

涉が居候している祐之介の下宿に初めて招かれたのは、梅雨も明けかかった七月半ばのことである。北四番丁の伯母の家の近くからバスを乗り継ぎ、北山の輪王寺前に着いたのは土曜日の午後三時ころだった。

厚い雲の向こう側にある猛烈な夏の太陽が、いまにも雲を弾き返そうと待ち構えているような日だった。涉は額を汗で光らせながら、停留所で私を待っていた。彼は身体にびったりとしたブルーグレイのTシャツを着て、白っぽいズボンをはき、いつもに増して大人びて見えた。

私の顔を見ると彼は黙ったまま微笑み、そのまま歩き出した。私たちは肩を並べながら、寺脇の坂道を上った。途中の酒屋で、涉は冷えたコーラとビールを三本ずつ買い、私はハート型をした不二家のアーモンドチョココレートを二枚買った。チョコレートが好きなの？ と涉は聞いた。私はうなずいた。彼は、病的なほど透き通る目をして私を見た。

静かな町だった。寺に接続した墓地を囲む木々の緑が目眩しい。坂道には何を売っているのかわからないほど小さく古びた店がいくつもあったが、どれもひっそりと静まりかえっていて人の気配はしなかった。

(小池真理子「無伴奏」より)

小池 光の 気になる日本語

4

「真」と「間」

「まじめ」を真面目と書くのは一種の当て字だろう。

シンメンモクないしシンメンボクという語が別にある。語義がまじめと同じようなのでいつか「真面目」の字面を借りるようになった。真、目はそのまま共通するが、「面」の字を「シ」とは読めない。

「まじめ」の語源は大言海にはマサキシメ(正目)の義とある。また真シ目の義で真の目の意味、とある本もある。マサキシメ、マシメ、……マジメと移ってきたものらしい。

「真シ目」の「シ」が脱落すれば「真目」「まめ」となり、あいつはまめに働く奴だという具合に現代語に生きている。まめに働くとは、豆のように働くという意味ではない(子供のころそう思っていた)。こちらは専ら「忠実」の字面を当てる。

目はもちろん視覚器官の目ではなくして、傾向や方向をいう目である。駄目、落ち目の目である。つねに「真」に向かうところのこの有り様が「まじめ」だ。

で、ここで「真」とは何かということになるのだが、一見何も難しいことは

ないけれど、考えてみるとなかなか深い。物事には通常の状態の奥に「真」の付く、よりグレードの高い、純粋なそれがある、とでもいえないであろうか。するとプラトンのイデア説みたいなものか。

真っ赤は赤よりさらに赤い。真っ黒は黒よりさらに黒い。ひらかなのかは仮名であり、仮名の反対は真名である。名は文字ということだから、仮の文字であるひらかなに対し、漢字という真の文字が想定されている。

「まこと」は誠と書くがこれも概念の借用で「まこと」は「まこと」、つまり「真事」であろう。現象の奥にある、現象を現象たらしめているエッセンスが「真」である。

ところで同じ「ま」の音のもとに、また「間」がある。すきま、何もないうしろ、空白をあらわすが、日本文化のさまざまな領域で、「間」は実に重要な働きをする。建築物、絵画、庭園、服飾などなどで、絶えずなにもない部分がある。なにかある部分と拮抗して、美を構成する。

これは言葉においてもそうで、話し言葉などはとりわけ間がどう生きているかで、まるきり印象が違ってくる。話芸の達人に徳川夢声という人がいたが、「話術は、マ術なり」と喝破した。マ術は魔術でなく間術という意味である。

流麗によどみなく流れているだけでは駄目で、言葉には微妙に「間」がなければならず、その「間」に引き寄せられて話はおもしろくなったり、盛り上がりたりしてゆく。

「真」は実質のエッセンスという感じである。対して「間」はその正反対の

空白である。虚実ということでは

「間」は虚中の虚であり、「真」は実中の実である。およそ対極の両者が同じ「ま」という音で把握される。これは偶然なのであろうか。いや、日本語の奥深さの一例ここにあるに違いない。(仙台文学館館長)

学芸室日記

○10月16日、脚本家の内館牧子さんが企画展「草野心平展」観覧のために来館されました。心平のファンだという内館さん、直筆の詩稿を前にして、創作のエネルギーが伝わってくると感嘆。詩人の言葉に共鳴するものがあったかもしれません。



「読売新聞」宮城版に連載中のエッセイ「内館牧子の仙台だより」(11月26日付)で、この日のことを紹介していただきました。



控え室での1コマ。館内の喫茶「杜の小径」の三山店長がお持ちした「お地蔵さん最中」にニコリ。

○12月3日、作家・瀬戸内寂聴さんが急遽来館されました。市内で行われる講演会の前、「寂聴展」の会場である当館でも、短い法話を下さることになったのです。広報がギリギリになったのにも関わらず、駆けつけて下さったお客様はなんと約900人!! 聴衆の皆さんは熱心に「寂聴説法」に傾き、元気をもらってお帰りになった様子でした。



館内がこれほどの人と熱気で溢れかえったのは開館以来のこと。

仙台、言葉の幸。

海の幸や山の幸があるように、仙台には豊かな言葉の幸があります。

時を超えて語りかけてくる言葉を味わい、

生まれたての新鮮な言葉を楽しむ。

仙台文学館は、たわわに実った言葉の恵みを、

その手ざわりや温もりとともに伝えていきます。

恩田陸

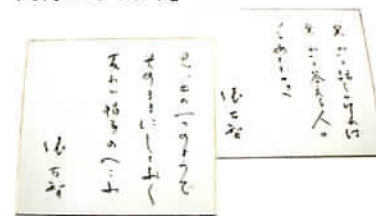
「仙台は匿名性が保てるギリギリの規模。小説の題材としてはすごく面白い」



「魔術師」原稿。めったに眼にすることができない、貴重な恩田陸さんの自筆資料です。

俵万智

「仙台は暮らすのにほどよい規模。都会のよさと自然に囲まれたよさの両方があります」



この二枚の色紙は、以前、俵万智さんが当館のイベントのために来館された時に書いてくださったもの。当時は、常設展示室にお目見えする日が来ると思ってもよかったです。

佐伯一麦

「仙台の日常をリアルに感じながら書き続けていこうと思います」



佐伯さんの創作ノート。原稿も展示されていますが、そちらも万年筆で書かれています。筆記具も作家によって違うもの。そんなことを目で確かめられるのも、自筆資料を見る楽しみです。

小池真理子

「私にとっての仙台は、精神的自立を迎えた時期に過ごした、鮮烈な存在感を放ち続けている街なのです」



「無伴奏にて7/24」原稿。かつて市内にあった喫茶店〈無伴奏〉で実際にしたためられた原稿。仙台にいた高校三年生～浪人中（1970～1971年）に書かれたものです。



「仙台、言葉の幸。せんだい現代文学案内」

このページで紹介した作家の方々のコメントは、常設展示室のリニューアルにあわせて出版した「仙台、言葉の幸。せんだい現代文学案内」に全文が掲載されています。お求めは仙台文学館または市内の各書店で（一〇五〇円）。ぜひ、手にとってじっくり味わってください。

伊集院静

「仙台は執筆するにはいいところなんじゃないかな。北の街の品性、知性は文学を育てるのではないかと思います」



「誰の胸の内にも」原稿（複製）。故郷の瀬戸内海についての随筆。風格が感じられる原稿です。

三浦明博

「仙台っぽい情緒や昔ながらの暮らしは忘れられるようになった。そんな消えゆくものへの感情を、エンタテインメント作品に込めたい」



三浦さん愛用の石。かつては、執筆のときに握るとアイデアが浮かぶお守りでした。今は、仕事が終わった後、マッキントッシュのパソコンのリングマークの上に置いてエネルギーをもらっているそうです。

歩く言葉。

佇む言葉。

～ 活躍する作家たち ～

熊谷達也

「仙台は見方によっていろんな表情を持っている。だから小説の舞台として魅力的」



「鈍行列車の女」原稿。普段はパソコンで執筆される熊谷さんですが、この原稿は「氷結の森」の取材でロシアのラザレフに滞在中に執筆したため、珍しく手書きです。

瀬名秀明

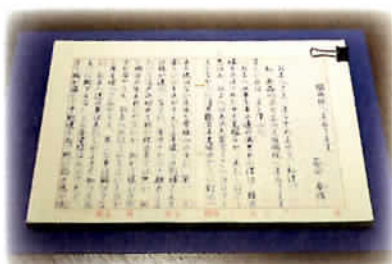
「本の世界が自分を向いてくれている、と感じるときが、人生の中で何度かあるのだと思います。仙台に来て最初の数年間が、私にとってその時代でした」



「パラサイト・イヴ」原稿。パソコンで書き上げて打ち出した初期の原稿。ここからさらに加筆訂正されています。すでに本の活字組みをイメージしたページ設定がなされています。

若合春侑

「仙台に唯一還る場所があると実感して、とてもとても嬉しく、安堵する」



「脳病院へまゐります」原稿。若合春侑さんは、この作品で文学界新人賞を受賞しました。

読書コーナー

本を手にとってゆっくり読める読書スペースを新たに設けました。ここは照明も明るく設定し、各作家の著作はもちろんのこと、特集が組まれていたり取材記事が掲載されたりしている雑誌も一堂に集めてご紹介しています。

そのほか、作家の方々が愛読するお薦めの本なども並んでいます。自分の好きな作家がどんな本を読んでいるのか、それを手にしてみるのも読書の楽しみです。



言葉の幸

ここに。

常設展示室
案内図

特集展示コーナー——⑧

文学をより広い視野と多彩なテーマでとらえた展示をお楽しみ下さい。1月からは、宮城県栗原市出身の脚本家の宮藤官九郎特集を予定しています。

大池唯雄・浜田隼雄——⑥
昭和14年、東北で初の直木賞を受賞し、史実に基づく歴史小説を書き続けた大池唯雄。教鞭を取りながら数々の文芸誌を手がけた浜田隼雄。戦後、宮城の文学界の中心的存在だった二人をご紹介します。

III 仙台・文学の源流

島崎藤村・土井晩翠・魯迅——④
お客様からのご質問やお問合せが多いベスト3、島崎藤村・土井晩翠・魯迅。リニューアル後の展示では三人の業績をわかりやすくまとめ、藤村・魯迅の仙台での足跡をゆかりの地図でご案内しています。

I 一本の巨樹

6〜7頁で詳しく紹介！

導入部——①
光をイメージしたグラフィックアートに、当館館長の歌人・小池光の短歌作品が立ち現れては消えてゆきます。不思議な余韻をお楽しみ下さい。

井上ひさし

「戯曲講座」映像——②

平成13年度に開催した「戯曲講座イブセン」の様子を放映。井上ひさしが戯曲の読み解き方と楽しみ方を説いたシリーズの第1回目をダイジェストでご覧頂けます。じっくり腰を据えてお聞きになりたい方は、2階の情報コーナーでも視聴できます。



3階常設展示室

扇畑忠雄・佐藤鬼房——⑤

歌誌「群山」を主宰した歌人・扇畑忠雄と、俳誌「小熊座」を主宰した塩釜の俳人・佐藤鬼房。昭和から平成まで宮城の歌壇・俳壇をリードし、文学館にもお力添えいただいた二人の作品世界と資料を紹介しています。



「おてんとさん」と宮城の児童文化運動——⑦

仙台が生んだ童謡詩人・スズキヘキの作品世界のほか、壁面に新たに設けた本棚では、宮城ゆかりの作家の方々の児童書・絵本を紹介しています。小さい頃に読んだことのある、懐かしい本に出会えます。



II 走る言葉。歩く言葉。佇む言葉。

2〜3頁で紹介しています

活躍する作家たち

熊谷達也さん来館！！

10月22日、熊谷達也さんが当館で開催された県の高校文芸部の総合文化祭の講師として来館され、常設展をご覧になりました。以前の展示は明治や大正時代のいにしへの文学者が中心で、自分からは少し距離があって寂しい感じがしていたという熊谷さん。新コーナー「活躍する作家たち」をご覧になり、仙台にゆかりの作家が多いことを改めて認識していました。ご自分のコーナーについては「自分のことでない感じがする…恥ずかしい」と照れくさそうでした。



佐伯一麦さん来館！！

10月29日、仙台市青年文化センターで行なわれた、ピアニスト・小山実稚恵さんのコンサートの前に、足を運んでくださいました。井上ひさしコーナーでは「四十一番の少年」の原稿に吸い寄せられていました。中学時代、母親が入院中の心細い時に出会った作品で、担任の教師との交換日記に感想を書いた思い出深い一冊とのこと。「見ることができてよかった」としみじみもらされていました。「作家の文学にかける態度（姿）」というものは、一朝一夕にできるものではない。やはり井上ひさし氏のコーナーからは、それが伝わってきますね。



また、パソコンで書かれ印字された瀬名秀明さんの「パラサイト・イヴ」の初期原稿については、その段組み、行間の設定の仕方に「原稿がすでに出来上がっている。作家の顔をしている」とのこと。「現物（原稿）は作家の息づかい、作家の態度（姿）を感じることができ、作品理解の大きな助けになると思う。作家を目指す人には、きつといい刺激になるので、是非いい原稿を見て、真似をして欲しい」とおっしゃっていました。

戦後日本文学という流れの中に立つ、一本の巨樹・井上ひさし。
愛と反骨をユーモアにくるみつつ、
ある時は小説、ある時は演劇を通して人生の真実を描いた作品は、
世代を超えた支持を受けています。

初代館長の魅力を
たっぷり紹介!

一本の巨樹

～井上ひさし～

ここでは、「作家の原風景～生い立ちから高校時代～」現代の戯作者「井上ひさし in 仙台文学館」の3つのコーナーで、井上ひさしと仙台とのかかわりや、その執筆活動について紹介しています。ケースの中には、作家の息づかいが感じられる資料を展示、井上ファンも、これから井上文学に触れようとする方も必見です。



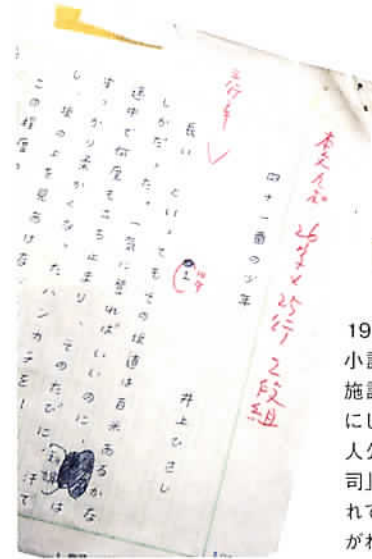
井上ひさし
1943年、山形県東置賜郡小松町(現、川西町)生まれ。49年、仙台市の光ヶ丘天使園(現、ラ・サール・ホーム)に入り、東仙台中学校に編入する。翌年、仙台一高に入学。卒業までを仙台で過ごす。上智大学卒業後、放送作家としてスタートし、以後戯曲、小説、エッセイ等幅広い分野で膨大な作品を執筆。84年には劇団「こまつ座」を旗揚げし、現在、代表を務める。98年、仙台文学館館長に就任、2007年退任。

開館10周年を記念する展示は
「井上ひさし展(仮称)」(2009年3月～7月)を
予定しています。お楽しみに!



井上ひさし
座右の銘の色紙

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに、書くこと」は、井上作品の原点でもあります。



自伝的名作
「四十一番の少年」
の原稿

1973年に発表された中篇小説の原稿。仙台の養護施設で過ごした経験をもとにした、自伝的な作品。主人公の名前が「洋二」「謙司」「利雄」と何度も変更されているなど、創作の過程がわかる資料です。

資料紹介 井上ひさしコーナーの目玉資料はこれ!



「ひょっこりひょうたん島」人形も
お目見えしました (人形劇団ひとみ座所蔵)

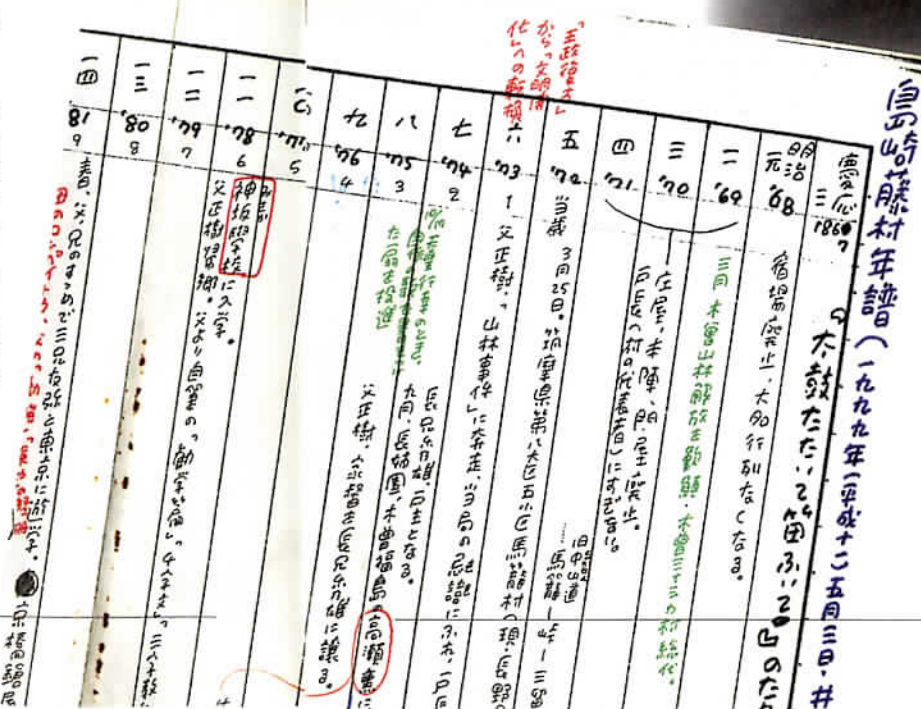
「ひょっこりひょうたん島」は、1964年から69年までNHK総合テレビで放映された人形劇。井上ひさしが児童文学者・山元謙久と台本を共同執筆し、斬新なストーリーで子どもたちから圧倒的な人気を得ました。(注:人形の展示は12月中旬で終了しました)



愛用のペリカン製万年筆
このペン先から多くの名作が生まれていきました。

知る人ぞ知る、井上ひさしの 自筆年譜

井上ひさしは、執筆にあたって綿密な準備をすることで知られています。この島崎藤村の年譜は、林芙美子が主人公の芝居「太鼓たたいて笛ふいて」の台本を書くために作成されたもの。藤村は劇中に全く登場しないのですが、藤村の娘・こま子が重要な役どころであることから、これだけの詳細な年譜を用意して、こま子の人物像をかたちづけているのです。



常設展示室リニューアルに寄せて 仙台文学館館長 小池 光

仙台文学館がオープンして十年がたつ。

文学館の意義は、なんといってもまずその土地にゆかりのある文学ならびに文学者の業績の紹介、顕彰であり、資料の収集、研究である。

しかし、今回のリニューアルは、このような文学館展示の本来の役割を大切にしつつ、一方で仙台の文学の今日性、現在性に窓口を大きく開いたものになっている。過去の仙台の文学でなく、いわば現在進行形の仙台の文学へのより積極的なこだわりである。文学館の機能、役割をより現在に開かれた、アクティブな文化文学の活動の拠点にしたいとするねがいとそれは密接に重なっている。

仙台という北方の中核都市が、その歴史性、文化性、風土性において、また落ち着いて調和の取れた自然環境、交通の利便性などにおいて、いまあらためて注目を浴びている。若くすぐれた、現代を代表するような文学者たちがここを拠点としさまざまな活動をみせるようになった。かつてなかった現象といえる。

劇作家、小説家井上ひさしの豊饒な作品世界が仙台・東北を根底にもつのであるのはいうまでもない。佐伯一麦はじめ次世代の有力な作家たちがこれほどならぶ都市も多くはない。

リニューアルされた常設展示によって、今日の文学都市仙台の息吹がふれていただければ幸いである。

コラム

文学館の小さな住人たち - その1 -

台原森林公園に隣接し、豊かな自然を誇る仙台文学館の敷地には、さまざまな動物が生息しています。たとえばこの愛嬌たっぷりのミドリガメ。知ら



れざる文学館の池のメスです。池水によく目を凝らすと、悠々と手足を動かす姿を目撃できます。つがいで住んでいて、交代で池に入っては、また陸地に戻ってきます。寒い時期は冬眠中ですが、暖かくなれば、天気の良い日に甲羅干しをしている場面に遭遇するかもしれません。